経済変動総研
細田哲生

# 歴史的な大暴落で日経平均株価は2010年2月まで本格上昇の公算薄く

## 歴史的暴落は下離れの典型パターンを示す

前回コメント時は相場の方向性が明らかになるのは08年10月に入ってからと申し上げましたが、8月後半からの反発はないままに結局下げが加速する結果となりました。10月28日6994円安値までの大暴落は、それほど経験できる変動ではありません。

これから何回かに分けて一目均衡表における「変化日」の概念について説明していきますが、とくに08年8月後半から10月に至る変動を月足、週足、日足で確認しながら、それぞれ変化月、変化週、変化日の活用例を解説していきたいと思います。

いずれにしても、この下落は歴史に残る変化と言えるだけに、おそらく多くの投資家の記憶にも、長く残るであろうと思います。一目均衡表の分析から見ても下離れのひとつの典型を確認しえる大切な波動といえます。ともかく、月足均衡表の完全な悪化と03年4月水準を割ったことによって、日経平均株価は2010年2月以降まで本格的上昇は考えにくくなったと分析できます。その理由をこれから述べたいと思います。しばしお付き合いください。

## 2010年2月まで底打ちの確証を得るのは困難に

さて2010年2月あるいは6月の変化月については08年の「一目均衡表講座」で次のように解説しました。

(1) 2000年4月高値から37カ月の下落に対し07年2月高値から37カ月目が2010年2月、07年6月高値から37カ月目が2010年6月になります。

(2) 03年4月安値から2010年2月まで83カ月、2010年6月まで87カ月ですが、この83は96年6月高値から03年4月安値までの下落83カ月に見合うものです。また87は1989年天井に至る上昇数87カ月に見合うものになります。

数の対応のさせ方は波動構成の考え方によるもので「対等数値」と称しますが、ここで使っている数37、83、87はすべて一目均衡表の基本数値です。

さらには2000年4月高値を中心として90年6月高値から00年4月までは119カ月、00年4月から119カ月目は2010年2月であります。

03年4月を割り込み下げ三波動を明確にした以上、96年6月高値の中心点としての意義は失われる事となり、改めて89年天井からの下げ償却を考える必要が出てきます。二番天井、二番底からの三波動構成は時に極めて重要なものですが、それゆえに90年6月高値の意味は極めて大きいものとなります。

2010年2月変化月は戻り高値になる可能性があります。場合によっては、何も明確にならない場合もありますが、少なくともこの変化月までの時間を経過するまでは底打ちの確証は難しいものとご理解ください。

## 基本数値と対等数値を使用して売り買いの判断を下す

そもそも、一目均衡表における基本数値は9と26を基に導かれる数値であります。9、17、26、33、47、51、65、67、76、83などがありますが、13、37 (13×3－2) も基本数値、87 (51＋37－1) もまた基本数値です。

一般的に相場の「騰」、あるいは「落」の日数は基本数値に律せられやすい傾向があること、それゆえに対等数値も基本数値になりやすいことは知っておく必要があるでしょう。

相場において大事なことは先ずは「上げ」か「下げ」かの判断、判断できぬ場合はいつ、いかなる変動を経れば判断を下せるか、ということになります。上げ(買い)、または下げ(売り)の判断も「いつまで」という時間を含めて判断を下さねばならないわけで、基本数値と対等数値を用いて変化日を定めるのです。

したがって変化日には売買の予定表的側面と、それまでの変動の意味を推し量るチェックポイントとしての側面があります。が、三波動構成という原則から捉えればこの日までは上げる、この日までは下げる「はずである」という、転換日としての意味合いが大きいことが判るでしょう。

一般的なサイクル論ではこの点のみ強調されがちでありますが、相場を固定化するためにかえって使い物にならぬ、ということになりやすいのです。しかし、一目均衡表はそうではありません。

一目均衡表の原著で変化日説明に1転換、2加速、3変化とあります。転換せぬ場合にはそのまま相場は急調子になるケース、変化日自体が変わる(基本波動が変わる)ケースがありまして、これらについてはおいおい説明していきます。

2010年変化月は予め想定せられるものではありますが、2010年2月が底値となるか、戻り高値となるか、また変化月として機能するかしないかは相場の変動に併せて想定を変えるべき性質のものでありま


Copyright (C) Keizaihendousouken Co.,Ltd. 2003-2010 All Rights Reserved.

図1

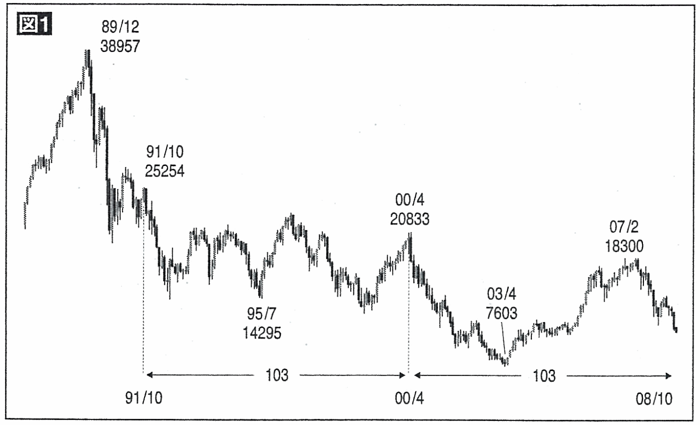
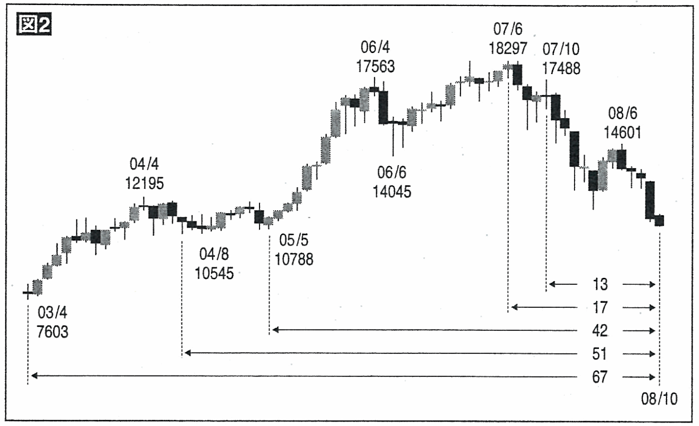



図2




す。話が逸れてしまいましたが変化日(ここでは変化月)は相場における重要な起点からの基本数値、対等数値をもとに定める。そして、いくつもの起点からこれらの数値が重なるポイントはとくに重要であると理解下さい。

## 10 月変動のポイントで暴落の様相を呈していた

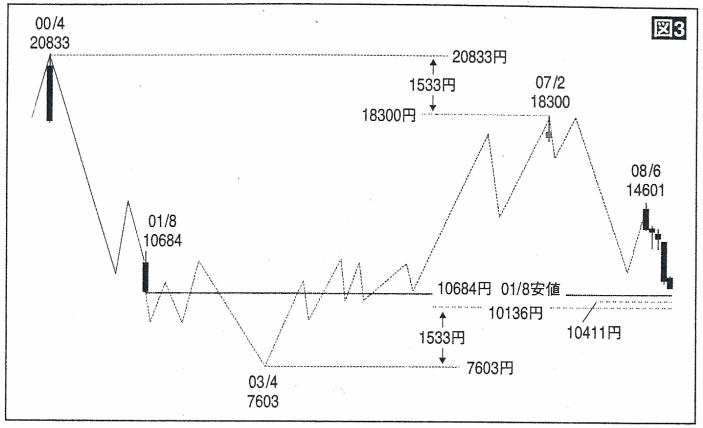
08年の10月も次の点で極めて重要な変化月でありました。

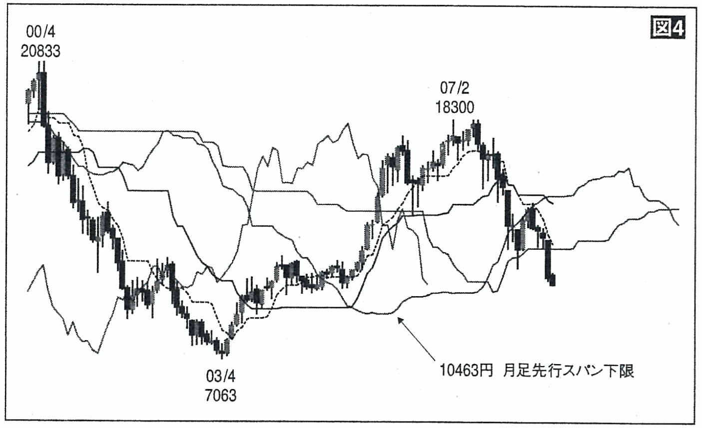
00年4月高値を中心とすれば91年10月高値から00年4月まで103カ月に対し、00年4月から10月まで103カ月となります(**図1**)。

03年4月安値から67カ月、04年8月安値から51カ月、05年5月から42カ月、07年6月高値から17カ月、07年10月から13カ月、という基本数値の重なりが見られます(**図2**)。

08年10月3日の段階での月足をグラフで表せば図のようになります。均衡表(遅行スパンと先行スパン下限の関係)の位置(**図3**)、波動の破綻の可能性の有無(**図4**)、00年高値からの中間波動の限界値1万136円(**図5**)などから考えても、これ以上の悪化は大暴落の可能性をはらむものなのでした。

07年からの変遷で重要としてきた変化月がすべて戻りの限界として機能してきたこと、重要視した08年8月に反発できなかったばかりか、この陰線が下げを助長しつつ10月を迎えた(6月からの変動を一波動と見なさざるを得ない)ことはまさに暴落直前の様相を呈していたのであります。




10月3日時点で考えたのは次の二点でありました。一つは10月終値は1万400円を割っていてはいけない(遅行スパンが先行スパン下限を割り込むことになる)。第二にp計算値で1万136円は割ってはいけない(2000年高値からの中間波動ではなくなってしまい、下げ三波動は明確になってくる。07年高値からの三波動構成では10月よりも11月がより重要で下落を明確にしやすい)。

さらに87カ月前の01年8月安値1万684は重要な相場水準です。したがって最悪でも1万400円を相場水準とし1万136円から1万684円でのレンジでのモミアイを演じつつ上げに転じられないならば、そしてその想定が早い段階で崩れるようならば、08年6月高値までを第二波動とするN計算値7992円を取らざる得ないと考えるほかない。それほど下支えの可能性が見出せぬ変動でありました。

これは日足、週足での判断でもあり、詳しくは次回にまわすことにしたいと考えますが、いずれにせよ決して対処の出来ない変動ではありませんでした。

---

残念なことに日経平均株価は1万円を割り込み暴落が決定的になってから、買いで入った一般投資家は多かったようです。これらがしこりとなれば低迷の長期化は自然であり、改めてただごとではない変動であることをよく認識してほしいと考えます。


Copyright (C) Keizaihendousouken Co.,Ltd. 2003-2010 All Rights Reserved.

一目均衡表講座　Vol.23

経済変動総研
細田哲生

# 下げ止まりの証明がなければ長期投資はやるべきではない

## 相場に張り付けない一般投資家でも予見が可能に

私の一目均衡表講座も残すところ、あと3回となりました。

これまで長きに渡り、一目均衡表の基本から応用までひと通りのことは解説してきましたが、「変化日」については余り具体的に説明してはきませんでした。

ひと言で表現しにくいということだけでなく、簡単な説明では相場変動そのものに対し誤解を与えやすいからです。

したがって、これまで変化日、変化週、変化月という言葉はその都度、相場に即して含みを持たせつつ使用してきました。前回の解説では、とくに昨年10月変化月に焦点をあてて実際の使い方を提示する狙いもあったのです。

今回は昨年10月暴落前夜までの変動を日足、週足で補いつつ、変化日、変化週の使い方をご紹介したいと思います。

なお一般的に相場解説を「後出しじゃんけん」と揶揄する向きもあるようですが、「後付け講釈」という合理化は常に「癖」として成される必要はあると考えます。

後付けで合理的に整理出来ることは、事前に、あるいはその時点で整理できるものです。また後付けで合理的に整理出来ている、ということは少なくとも一目均衡表においては今、現在を把握している事と同義でありまして、私が昨年10月始めにメールマガジンなどで「03年安値まで一直線の下落もあり得る」とコメントできたこと、また日経平均株価1万円割れを安易に下げ止まりと判断しなかった事は決して偶然ではありません。

その都度、一目均衡表で相場変動を合理的に整理し、変化日での表れ方をチェックし続けてきた結果であります。これは職業人としての専門性の問題ではありません。ふだん相場に張り付くことのできない本誌読者であっても必ずや身につけられる対処法のひとつなのです。

## 基本数値の表れ方を確認すれば高値限界が分る

前置きが長くなりましたが早速昨年10月までの変動を今回は週足で確認いたしましょう。

**図1**、**図2**をご覧下さい。

図1は日経平均株価昨年11月までの週足均衡表グラフ、図2は05年10月高値を起点として基本数値での表れ方を把握するために図1を簡略化したものです。

私が05年10月高値を起点としてその基本数値を変化週と定めたのは昨年3月からの戻りを経てのことであります。

基本数値の表れ方を確認すれば07年2月高値まで74週(33＋42－1)、109週、117週が高値位置であると同時に均衡表を高値の限界としていることが分かるでしょう。

昨年1月までの変動で05年10月高値を割り込み、戻りを見せた昨年2月高値は同水準と見なせます。

この2月高値が126週でやはり基本数値となりました。

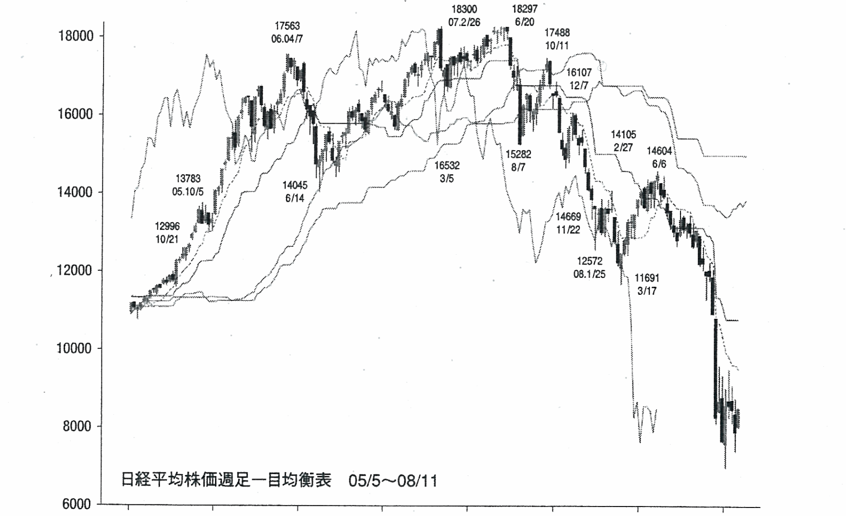
129週目の3月安値からの反発の後はこの05年10月高値の相場水準としての意義を考えるのに充分な変動でありまして、その後133週目、142週目、147週目、151週目などは予め変化週として相場を勘案することになります。

## 151週目から反発力見せず相場の悪化を考える

昨年3月安値は悪いなりに下げ止まりの可能性を持っていたことは、月足の一目均衡表を見ても直感できるのですが、この週足の相場水準を05年10月高値1万3783円と置けば、1万3783円×2－1万6107円＝1万1459円で07年12月からの下げを償却した可能性があったことが分かります。

07年12月からは8週の下落、9週の2波

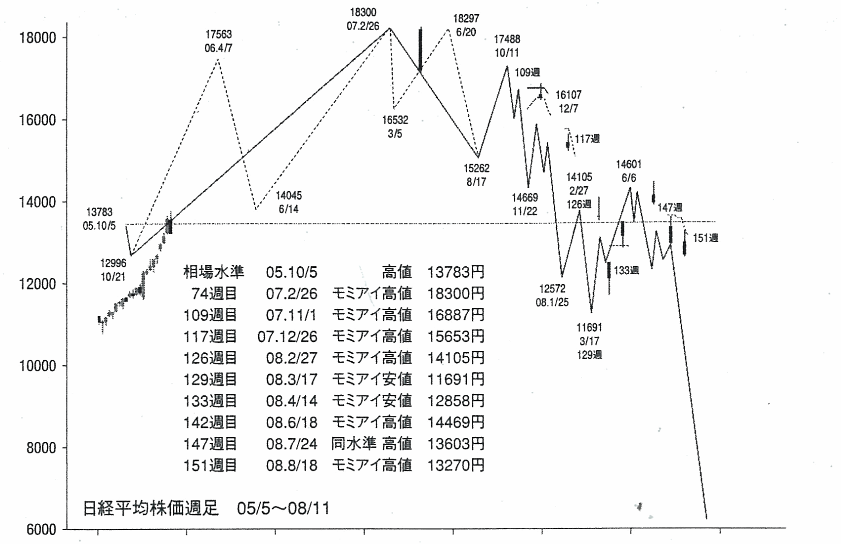
図1






Copyright (C) Keizaihendousouken Co.,Ltd. 2003-2010 All Rights Reserved.

図2




動構成で08年3月が安値となり、長期変遷における相場水準の決まり方は直近の高値安値からの影響力から勘案します。

結果的に133週、142週と1万3787円を相場水準とした基本数値の表れ方が顕著であり、モミアイでの高安になるかという表れ方を見せる結果となりました。

ここで147週目が相場水準への戻り高値となり、151週目から反発力を見せられなかったことは相場の悪化を考えるに充分な表れ方であることが分かります。

相場水準1万3783円へ07年10月高値からの下落が影響するとすれば計算値は1万0078円、07年2月高値からの下落が影響するとすれば計算値は9266円となり、いずれのケースも月足均衡表による下支えの可能性を否定するものとなります。07年3月安値から07年6月までを第二波動に対する下げ三波動の可能性が極めて高くなるということであり、とくに151週目の8月18日高値からの下げ過程はその後の変動に決定的な影響力を持つ結果となっています。

日足変遷は後で確認する事として週足で08年1月安値を起点とする場合、08年3月安値を起点とする場合の基本数値をお調べ下さい。

時間経過とともに相場水準自体の下落を確認できることになりますが、その決定的な表われはやはり昨年9月以降のことであり、日足変遷における8月18日高値からの独立性がハッキリしてくる、月足変遷においてもギリギリのポイントとなるという局面を経て昨年10月にすべてが重なっていたことは非常に重要であります。

## 上げ相場では押し目を、下げ相場では戻り探しに役立つ

次回は日足変遷で昨年10月までの変動を確認することにいたしますが、残りの紙面を利用して僭越ながら皆様にアドバイスをいたします。

本誌読者が果たしてどのように相場に対峙をなさっているか、そしてこれまでの結果がどうであるかは分かりません。このため、結果的に皆さんが何を求め、何を悩んでおられるか明確ではないのですが、年4回の季刊発行という性質上、目先短期の激しい商いをされる方は少ないのではないかと思います。

ある程度、将来を見据えた長期投資という方が多いのではないかと思うのですが、いかなるスパンの売買であっても大事なことはまったく同じなのです。

相場は動くか動かないかが大事、動かなければ動く瞬間を勘案し、動けばいつ、いくらまでの変動なのかを予想することで、投資の対処方法が決定づけられるのです。対処が決まっていない人がうまく相場で生き続けられるほど株式投資は甘いものではありません。

さる著名な長期投資家が昨年1万円割れを買い場として唱えておりましたが、それはそれで経験に基づくものであるのでしょうが、果たしてその後の対処が合目的であったと言えるかどうか甚だ疑問です。

相場の長期低迷は決定的でありますが、その際、買い値まで相場が戻る保証は現在ありません。仮に戻ったとしても戻るまでの時間を無駄にしている。それも、さらなる下落の可能性に晒されながら塩づけにしている、ということであるならば本来の目的を大きく逸脱しているということになりはしないでしょうか。

下げ過程においては下げ止まりの妥当性を考えること。そしてその証明を経なければ如何に長期投資といえども安易に値ごろ感で買うべきではないのです。

罫線の意義はその確認作業としての意義だけでも明確です。

一目均衡表の特徴を考えてみてください。

上げ相場は押しとして機能し、下げ相場は戻りとして機能しやすい。ただその一点を知っているだけでも売買においては有効であり、均衡表を上抜かない上げ相場、押し目としない上げ相場は有り得ないのです。

皆さんの投資判断がいかなる点にあろうともこのことだけは真実であります。

---

さて次回は日足変遷過程の確認と、一目均衡表の準備構成について解説いたします。
また一目均衡表に興味がある方にお知らせです。一目均衡表解説のDVDを作成いたしました。
40分程度ですが基本数値の基本的な捉え方、考え方を解説しています。
●お申し込み、お問い合わせは
経済変動総研042-396-4383まで


Copyright (C) Keizaihendousouken Co.,Ltd. 2003-2010 All Rights Reserved.

一目均衡表講座 Vol.24

経済変動総研
細田哲生

# 変化日は基本波動を明確にする重要なチェックポイントに

## 日足変動から判断する変化日の確証の得方

2回にわたり08年の10月変動について解説しました。月足、週足それぞれについて変化月、変化週の定め方、確証の得方を説明してきましたが、今回は日足変動を見てみたいと思います。

08年変動で最も印象に残るのは、恐らくは10月の大暴落でありましょう。

とくに10月8日の下落率はブラックマンデー、スターリン暴落に次ぐ下落率あり、それに続くのはIOSショック、ニクソンショックとなります。

これらほとんどが天井、あるいは二番天井からの崩れであるのに対して、08年10月変動が、ほとんど下げきったかに見える位置からの暴落でありました。

また、日経平均株価は、05年5月までの長期持合い相場で1万円を割ることなく、一つの節目を成していたということもあり、安易な経験則で下げ止まりを楽観した人も多かったことでしょう。

しかし、8月、9月の変動を整理すれば充分間に合う相場だったのであり、とくに変化日の8月18日高値、8月18日安値、さらに8月22日安値を割ってからの推移こそ、相場の悪化を決定づけるものだったのです。その意味で、私にとっては最も印象に残る変化日ですが、今回はこの二つの変化日（8月18日と8月22日）についてご説明いたしましょう。

## 03年安値を脅かす変動である前提があったことを確認する

先ずこの8月変化日を前にして次のような前提があったことをご確認ください。

①07年の株価予報でも述べたように07年2月高値、6月高値を経て10月からの下落では2010年2月までの長期低迷、場合によっては03年安値を脅かす変動であることを08年年初の段階で直感しえたことです。

②08年年初の暴落、次いで3月安値までの暴落は長期低迷を決定付けるものでありました。

が、必ずしも直ちに03年安値を脅かす状態とは言えません。1月、3月ともに月足先行スパンに終値では踏みとどまるものとなっていたからです。

6月までの戻りは先行スパン上限を限界とするもので決して良い戻りとは言えませんが、8月変化月、先行スパン下限での反発が見られれば、準備構成（底値固め）後の再出発も期待しうるものでした（**図1参照**）。

③前号で解説したように週足05年10月高値からの基本数値では08年2月以降極めて適切に高値、安値をつける結果になっています。

147週目、08年7月相場水準位置からの下落で注目すべきは151週目であり、8月18日、8月22日週がこの151週目にあたるものでありました（**図2参照**）。以上を踏まえ日足変遷を確認しましょう。

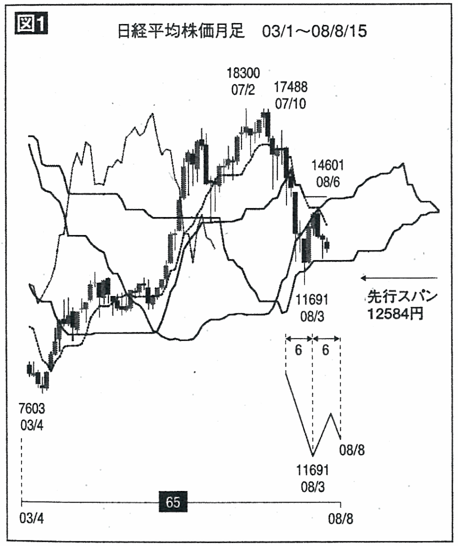
先ず6月高値からの下落では7月16日安値は先行スパン下限をも割り込む結果となりました。無論このことは下げ相場を示唆するものでありますが、08年1月安値を割り込んでいないこと、7月24日までの短期の半値戻しで②を強調、6月高値から7月安値までの下げの時間償却が良い形で成されれば、その後の再出発で何とかモミアイの可能性を残すだろうと考えることが出来ます。

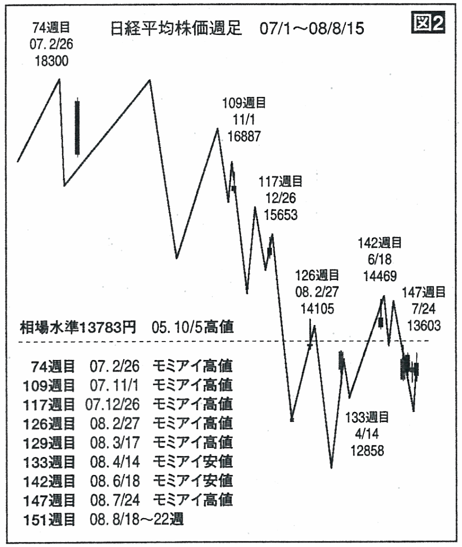
ここで時間関係を整理すれば（**図3参照**）8月21日、及び27日が極めて重要であることがおわかりになるでしょう。

## 「反発すべき」ギリギリのポイントが判明する

高値、あるいは安値からの基本数値、モミアイの起点からの基本数値、三波動構成のポイントとしての対等数値、などで変化日を定め、いくつもの観点から重なるものは特に重要なのですが、特に変化週として重要な8月21日は「反発すべき」ギリギリのポイントだったと言えたのです。

したがって当時私は8月21日からの出発に期待をしていたのですが、8月18日の表れ方を確認すれば「下げ相場」への判断

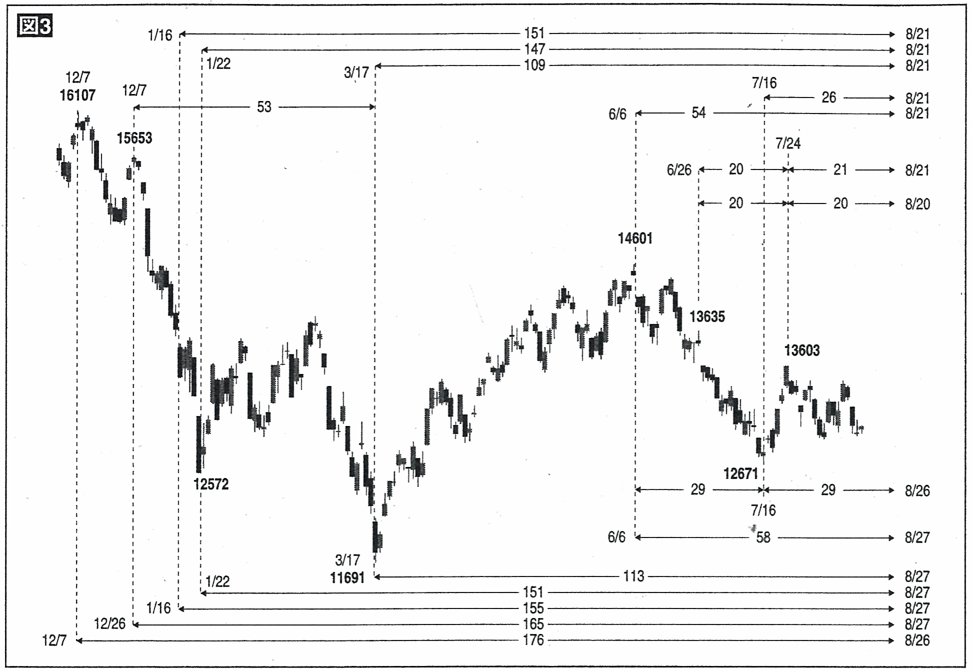




Copyright (C) Keizaihendousouken Co.,Ltd. 2003-2010 All Rights Reserved.

図3




に大きく傾く結果となりました。

**図4**をご覧ください。日足変遷での下げ相場の出発点は上げ相場の終点でもある07年2月高値でありますが、08年1月安値までの下落日数が144日に対し08年1月安値から144日目が8月18日にあたります。

下落日数に対するモミアイという考え方になりますが、1月22日陰線と8月18日陽線は同水準、ここで8月18日高値が基準線及び転換線に圧迫される形で下げており、新たな下げ相場の起点となりかねないという懸念をはらんで8月21日変化日を迎えたのです。

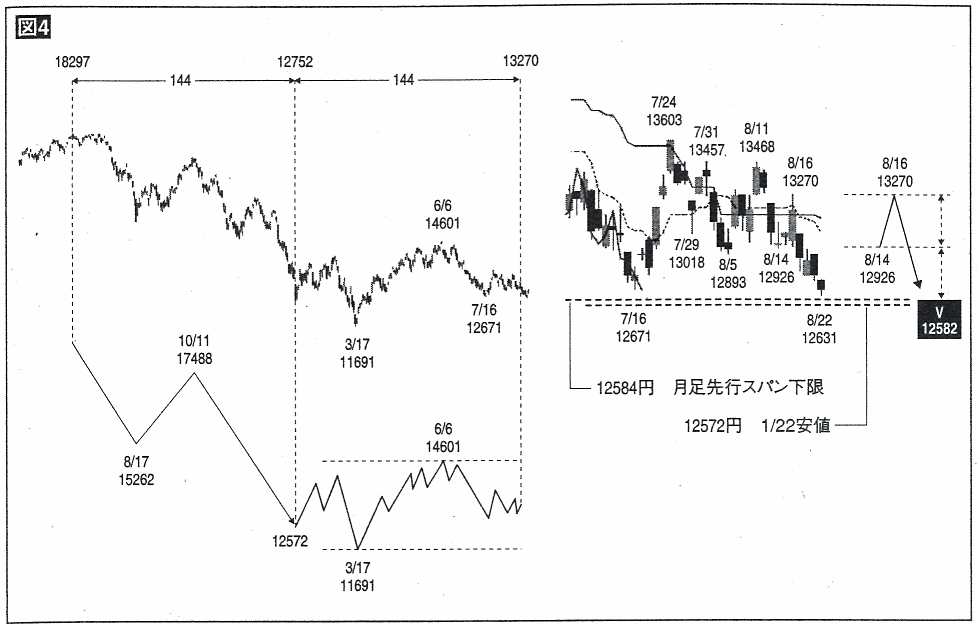
8月21日変化日の翌日、いったん下げ止まりましたが、その後の戻りは日足、週足ともに完全に上値を圧迫されるものとなりました。8月22日安値を割り込むことで下げ相場をほぼ決定的にしたのであります。

9月変動での緩やかな下落は6月高値までの上昇、7月の短期の戻りがそれぞれ第二波動（変動の中心）として働いていたからであり、時間的制約が消えた10月に入って相場は下落を加速させたのであります。

要するに変化日とは三波動あるいはモミアイの観点から基本数値、対等数値によって定めるものであり、特に重なる変化日はより重視せねばなりません。

この変化日は原則的には転換を期待しつつ見るのでありますが、変化日で反応がないケース、変化日からそれまでの方向性が助長されるケースなど様々ですが、結局のところ基本波動を明確にするためのチェックポイントになります。

図4




それまでの経過、確かめてきた前提によって、この変化日までは高い、あるいは安いという判断が出来るようになるまでご研究いただきたいのですが、変化日における均衡表との関係も特に大事ですので、これもまたご確認ください。

8月18日高値は図4の時間関係での変化日でありますが、この高値位置が均衡表に圧迫されていることがわかります。

均衡表を押し目とする、戻りとする、ということは、そのポイントは騰落の一つの出発点となりうるということでもあります。結果的に08年10月28日安値位置が8月18日を起点とする三波動の時間関係になることもご理解いただきたいと思います。

したがって08年10月下げ過程においてつけた10月14日陽線など断じて買うべきではないのですが、ここまで読んで頂きご理解できましたでしょうか。

これは後づけ講釈ではなく、08年変動で予めあるいはその度コメントしてきたことです。後講釈出来ることを予め想定出来ないようでは、もろもろのことを生かすことは難しく、大いに研究していただきたいと思います。

---

さて09年の変動でありますが、ここまで必ずしも変化日、変化週、変化月が適切とは言えません。

それはやはり最後の下げ幅が大きすぎたということで、時間経過を成すか、ある水準を上抜く、あるいは割り込むまでは変化日が決まらないことも多いだろうと考えます。

したがって、変化日＝売買決定日としての活用は初心者は避けること、先ず数を数え、はっきり言い得ることから整理していっていただきたいと考えます。

一目均衡表の基本数値に関してはDVD「一目均衡表の真実」（定価6,000円）で簡単に解説しております。お求めは千代田書店（東京都中央区日本橋茅場町2-14-1　第一井上ビル1F101　TEL03-5652-8788）へお問い合わせください。